

子どもが生きる力をつけるために親ができること

工藤 勇一 かんき出版 2019.10.

著者は、「**学校の当たり前をやめた**」校長として有名です。中学校の改革をした著者が、子どもに生きる力をつけるためには何をすべきなのかを、分かりやすく熱くまとめている本です。

- ◆「主体的になっていく」というのはおかしな表現で、「主体的に戻っていく」というのが正しい。なぜなら本来、**生まれたばかりの子どもは主体的**。
- ◆人は「**心的に安全な状態**」だと、脳内の思考・注意や、感情のコントロールをつかさどる部分がうまく機能し、思うように行動できる確率が高まる。反対に、「**心的に危険な状態**」だと、思うような行動が取りにくい
- ◆よかれと思ってかけた言葉が子どもに多大な影響を与えていることはある。
子どもが気にしていないことは、あえて指摘しない方がいい
- ◆「あの子はだめだなあ」、自分の子どもには関係ない言葉に思えるかもしれないが、子どもは2つのメッセージを受け取る
 - 1 「あなたは**失敗**しちゃだめよ」
 - 2 「あの子は**尊重**しなくていい子。**排除**してもいい」
- ◆親が物事を**人のせいにする**ことを見て育った子供は、うまくいかないことをいずれ親のせいにするようになる
- ◆本当の厳しさとは、この人には**信用されたい**と思わせること
- ◆叱るときには「**子ども基準**」で
叱るときに「**親基準**」にならないようにする